

市民討議会によるまちづくり City Reformation by Citizens' Deliberation

小野 亨*

Toru ONO

1. はじめに

(社)茅ヶ崎青年会議所は創設から40年経ち、時代背景の変遷とともにそのまちづくり運動もハード面の充実からソフト面の意識醸成へとシフトしてきた。本年はスローガンを「We love CHIGASAKI! ~育もうシチズンシップ~」とし、子ども達には愛郷心を育み、将来このまちのために行動できる大人になってくれるように、また大人達には、自分のためだけではなく、まちのため、地域の未来のために責任ある判断と行動ができるよう促し、そんな背中を子ども達に見せるよう、数々の事業を計画し、行ってきた。その一つとして、茅ヶ崎市と文教大学との協働で市民討議会を開催するに至るが、実を言うと私達はその開催経験や豊富な知識があるわけでも、潤沢な予算を持ち合わせているわけでもない。あるのは地域の青年として、子を持つ親として、夢と希望を抱く権利のある、将来幸せに暮らせると信じている子ども達のために、私達が今すべきことへの使命感と行動力のみである。貴重な「運動」の機会をいただいた本稿において、我々が今なぜ市民討議会を行う必要があると考えるのか、乱文ながら寄せさせていただきたい。

2. かつての日本人

私は昨年、青年会議所の事業でアマゾン支流のトメアスというまちを訪れ、そこでご活躍されている日本人とお会いし、移民の歴史についてお伺いする機会を得た。そのまちは今から80年前、何もないジャングルだったところへ、日本からの移民船が渡り、開拓した歴史を持つ。入植当初はマラリアが蔓延し、なす術もなく家族が次々と亡くなっていく、想像を絶する環境の中で、掘建て小屋に暮らし、毎日人力のみで森を拓き、畑を耕し、着るものも満足にない状況でありながら、その方々は何とかお金を貯め、まずは教師を雇い子ども達を学ばせたそうである。子どもたちに苦勞させてはいけない、そんな思いだけは断固として持ち続け、長い時間をかけて地域を形成し、自警団や農業組合を組織し、地域のお祭りや運動会を開催し、子孫が住めるまちを作ろうと必死に努力した。そして今では、現地の方も集まる、立派なまちが形成されていることを、誇らしげに、嬉しそうに話していた。今の自分より将来のため、一生懸命努力する日本人の姿がそこにあった。

3. 夢に燃える青年

まちづくりをする若者を表彰する、(社)日本青年会議所の人間力大賞という事業で、2007年のグランプリを獲得したのは、沖縄で地道にサンゴ礁の再生に取り組む金城浩二さんという方だった。その方は独学でサンゴの養殖と移植を研究し、一人時間を作っては海に潜り、サンゴの移植を続けてこられ、今では移植したサンゴが産卵をするまでに育っているそうである。彼は受賞のスピーチでこん

* (社)茅ヶ崎青年会議所

なお話をされた。「私の祖父は、自分が子どものころはもっとサンゴのたくさんある、きれいな海だったと言いました。私の父も同じことを言いました。でも私は、自分の子どもに同じことは絶対言いたくない、子どもにも言わせたくない。何とかしてきれいな海を残してあげたい。そう思って頑張ってきました。しかし経済的には苦労の連続で、子どもの希望も満足に聞いてあげられない自分もいました。信じた道とは言え、続けるべきなのか迷うことも多くありました。そんな時、息子がこんなことを言いました。「サンゴを守る父ちゃんがかっこいいよ」。そしてこんな立派な賞もいただきました。迷いながらも自分のしてきたことが認められて本当にうれしいです。これからも、沖縄の未来のため、子ども達に豊かな海を残すため、がんばっていきます。」そう、涙ながらにお話ししていた。自分の生活にある意味犠牲にし、家族や子どもに苦労を強いながらも、今の自分より地域の未来を優先するその一人の青年の努力に、多くの人が共感し支援の輪が広がった。

4. 今の大人

美輪明宏氏の「ヨイトマケの唄」という作品を、桑田佳祐氏が「21世紀に残したい歌」として選んだ。歌詞の中には、家族を養うために男衆に負けじと土木作業にうち込む母を見て、いじめられた涙を拭く子どもの姿がある。昭和の時代は子どもに苦労させまいと必死に働き、豊かな日本を築き上げた。その背中を見て育った子ども達は、苦難に立ち向かう強い心が育まれた。

新政権に望むこと、というアンケートでこんな結果があった。高齢者は、安心できる年金支給と医療費の軽減、経済界は景気回復と法人税減税、若者は所得と雇用の拡大。どれも次世代へ残る多額の財政出動が必要である。これが子どもたちに聞かせる大人の意見なのか。子どもたちに示すべき大人の背中なのか。自分たちは頑張るから、こんな不況でも何とか乗り切るから、次世代が苦労しない社会を作ろう、800兆円の借金は増やすどころか減らさなければならない、そんな社会システムを作ってほしい、そんな意見は、そのアンケートには皆無であった。

地域主権、財源の移譲を望む私達は、使うべきことを間違えてはならない。そして少子高齢化が進む昨今、今まで国や行政に頼っていた部分を、自分達で担わなければいけないのは明らかである。そんな、今の自分の為でなく、先を見据えた市民としての、国民としての、責任ある判断と社会参画を行うことが今後必ず必要となる。

5. 住民ではなく市民

市民という言葉の意味をどうとらえるか。単に「都市部に住む住民」というだけのもの、或いは「公害や大気汚染を一例とした国や行政と対峙して権利を守る保守的立場」といった個人の権利を主張する立場としてとらえる向きが多いという。また、青少年の意識調査によると、幼少期は昔から変わらず大人と交わる地域参画への意識は高いが、年を重ねるにつけ低下傾向にあるという結果もある。子ども会加入率が極端に低下している昨今の大人を見てみると、あるいは過度な「個人の尊重」教育を受けていると、あくまでも市民は公益の「受け手」であって、自ら参加し地域を作る「担い手」ではないという意識が醸成される環境にあると言える。政治や行政に対し文句を言いつつも、選挙や公園掃除には行かない、地域のお祭りは参加するものであって企画運営するものではない、福祉や教育、防災はサービスが提供されるべきもの、といった考えの大人には、子ども達に市民たるやが教えられない。「市民とはなんですか？」と聞かれて、地域の主体者だと答えられる大人が必要とされている。

「現状をしっかりと認識し、打つべき方策を示す、そしてそのために必要なのは一人ひとりの努力だ」この演説に全米から200万人もの人が集まった。この考えに多くの国民が共感し、米国初の黒人大統

領が誕生した。同国で生まれた世界共通の名文句「人民の人民による人民のための政治、国に何をしてもらうかではなく国に何が出来るか」今の日本こそ、この言葉の意味を真に理解しなければならない状況にある。

6. 守るもの、継ぐべきもの

私達が生まれる前から、多くの先人たちによって努力が積み重ねられ、守られてきたもの、それはこの茅ヶ崎の文化であり、環境である。そしてそれらは、地域というステージで、担い手が引き継がれてきた。これらまちのアイデンティティに傷をつけてはならないし、やめることはもちろん欠けてしまってもいけない、永続的に積み重ねていかなければならないのである。そしてこれらを繋いでいくエネルギーが、茅ヶ崎への愛情をベースとしたシチズンシップである。私達が受け継いだ、このまちの文化や歴史、自然はしっかりと守り育て、それが出来る次世代を育てなければいけない。私達が他県の方から少なからず言われる、「いいところにお住まいですね」という最高の称賛を、引き続き子どもたちにも受けさせるために、その誇るべきまちのアイデンティティを育て守る活動は誰かがしてくれるものと思わず、我が家の敷地、或いはお墓を守るのと同じ感覚で自らが行う必要がある。それが茅ヶ崎を愛する市民として示すべき、責任感溢れる大人の背中であり、そんな活動はカッコいいことだと子ども達には思わせていかなければならない。

茅ヶ崎が「いいところ」と次の世代も言われるかどうか、それはこれからの私達の判断と行動次第と言える。

7. 一人ひとりの参画意識

8月に行われた衆議院総選挙に先立ち、候補者の政策や情熱、人柄を自分の目で確かめ、責任ある判断が下せるよう、私達は候補者全員を一堂に会し公開討論会を開催した。集客のため、駅前のデッキで大きな看板を持ち、チラシを配って帰宅途中の方々に参加を呼びかけた。感覚的な数字だが、チラシを受け取ってくれるのは20人に一人ほどであり、それも全て60歳以上と思われる方々ばかりだった。開催時の参加者年齢もそれに比例し、昼間茅ヶ崎にいない働き盛りの有権者は、自分のまちから選出する候補者を責任もって選択する意識は低いと言わざるを得ない状態であった。現代社会において、政治に対する無関心層という無責任な市民が生まれてしまうこと自体、この社会のあり方に問題があると感じる。無関心が悪い、というよりも、関心はあるがどのように参加すべきなのか、どこへ参加すべきなのか、有権者への啓発が制度的にも不十分なため、よく分からないうちに無関心になっていった、という方々も多いと信じている。近代日本の社会は、どうやって社会参加の機会を増やし、どのようにこの社会にかかわっているかという実感を持たせるのか、という意欲を高めることから治療をはじめなければならぬ。そのためには、市民各層各所において、あらゆる機会の創出が豊富な状態でなければならず、青年会議所はこのような社会状態を若き青年層によって創出し、多くの市民が棄権せず社会に意欲的に参加できるまで昇華した状態が、目指すべき理想的な民主主義だと考えている。その意味でも、本年5月にスタートした裁判員制度は、賛否様々な意見がありながらも始めた意義は深い。市民は好むと好まざるとにかかわらず、また老若男女分け隔てなく社会から選択され、専門家任せにしていた社会の問題に正面から向き合うことになり、自己利益追求、自分至上主義な風潮のある現状の中に、公のことへ参加する意識が醸成される社会制度が確立される。これまで自分中心だった生活の中に、半ば強制的ではあるが、社会貢献の門が開かれるということだ。また、これまで新聞やニュースなどで見て、眉をひそめるだけで放置し専門家任せにしてきた事件と自らが

向き合うことで、それが起こってしまった背景や感情について考えることになる。この事件が起こったのは本人だけが問題だったのか、育った家庭や地域の環境、社会の情勢、あるいは制度や法体系などに問題があったのか、新聞を読んだだけでは考えなかったことを、この制度に関係した人は深く考察するようになるはずだ。制度としてはまだ多くの問題や不安を抱えている。しかし社会の負の部分は専門家に任せておけばいいということではなく、市民がしっかりと公のことに向きあう社会を実現させるためには、越えなければならないハードルであり、私達は自分のことだけでなく、公のことに取り組む姿勢を子どもたちに示していく責任もあるはずだ。

8. 未来に向けた計画

茅ヶ崎市は平成3年から運用してきた茅ヶ崎市新総合計画が、予定の計画期間20年を迎えるにあたり、平成23年を初年度とする次期総合計画の策定作業を進めている。これまでの20年は「自然と人がふれあう心豊かな快適都市 茅ヶ崎」という都市像を目指した行政運営がなされてきたが、現在次期計画で挙げられたテーマは「ひとが輝き」「まちが輝く」茅ヶ崎に向けてと転換された。一見すると両者ともに、いかにも行政が打ち出しそうな無難な文言が並ぶが、背景には大きな変化があり、よく見れば全く違うことを打ち出していることに気付く。茅ヶ崎市は幸いなことに平成32年までは人口が増えていくと見込まれているが、年齢分布には大きな変化が進行している。65歳以上の高齢者は平成7年度の11.8%から22年度は22%と倍増し、32年には27.7%と約4人に一人が高齢者になると推測されている。その分15歳～64歳のまちを支える世代が急激に減少し、高齢者のみの世帯が増加し核家族世帯が2～3世代目を迎える。当然それに伴い市税の収入が減収となり扶助費や保険給付費が増加し、厳しい市財政状況を予想することは難しくない。人口増で安心するどころか、急激な高齢化による収支不均衡是正のためにより一層の自主的自立的財政運営が必要となる。

そんな背景のもと、次期計画で最も転換を求めていくことになるのが、市民の力である。少子高齢化が進み、経済成長がこれまでのように見込めない状況の中、これまで通りの市民サービスを、行政だけで提供していくことが難しくなるのを見越して、今から市民の持つ力を十分に生かしながら行政との連携、協働を通じて自らそのサービスを担っていく必要があると判断した。

「みなさんの力なくしてこのまちは発展せず」そんな見出しを掲げ、主体的な「ひとが輝く」茅ヶ崎に向けた計画の立案に、昨今ありがちな、借金を前提としたサービスを餌に国民の意識を集め、自らの地位を確立しようとする墮落した政治とは違う勇気と指導力に敬意を表すると共に、今後も先を見越した責任ある判断を続けていただけることを期待したい。

9. 市民として

そんな背景を基に、茅ヶ崎市では市民の社会参画を促す機会を創出していくため、市民討議会を開催すると判断した。立ち上げた市民討議会実行委員会で打ち出した討議会テーマは、市民がまちづくりに主体的に参加し行政と協働してつくる彩り生活に向けて。市民が担える、或いは今後担うべき社会的責任や役割は何か、それによって目指す彩り生活は一人ひとりのどんな行動によって成り立つのか、そんな議論が行われる。この討議会は、無作為抽出による市民の選出によって、声なき多数者の意見を集約する手法として注目されているが、その導き出す結果もさることながら、側面的なメリットも多く合わせ持つ。事業終了までの様々な機会に行われる広報によって、参加者以外の市民へも社会参画意識や主体者たるべき意識が醸成されるなど、求める住民から行動する市民への意識変革を広く促すことができる。また、応募数が予想を上回ることから予想される、方向を示されれば前向き

にひたむきに目的を達成しようとする日本人としての勤勉な姿勢で、この課題に取り組む市民の参加意識の高さ、或いは目的に向けた行動と判断の可能性を行政側が目の当たりにすることで、市民の力を引き出す行政判断も今後一層拍車がかかり、市民側と行政側との切磋琢磨が促進すると期待される。1回の討議会で集約された意見によって大きく世の中が変化するわけではなく、それを求めるのは時期尚早だが、今後10年を見据えた偉大な一歩であることは間違いない。さらに欲を言うならば、この市民への社会参画意識高揚運動が、企業や著名人の社会参画意識と連携することでWin Winの関係を構築し、財政面でも行政負担が無い体制のなかで、参加した市民の手によって行われていく好循環が確立することを本実行委員会が最終目的として持ち、実現させることが出来たなら、その時初めて市税によって運営した本討議会、本実行委員会の意義に胸を張ることができるのではないかと。限られた貴重な投資によって、このまちにそんな好循環がいくつ生まれるか、それは私達の持つ夢と覚悟によって決まる。

10. さいごに

様々な環境で多くの人が暮らすまちにおいて、協力を求める方向へ意識を変えていくことはそうたやすいことではない。しかし私達は明日の実りを得ることより、将来このまちを担う大樹を支える土づくりを怠ってはならない。私達は先人たちのたゆまぬ努力、お天道様に恥じない勤勉さと、何より優先された子弟教育によって世界に誇れる国に暮らし、豊かな生活を得た。不登校やニート、多くの自殺者といった社会のひずみを治す術もなく、次世代へ贈る借金で今をしのごうとする今の大人たちを、子ども達は将来どう評価するか。そしてその子たちが大人になって気付いた時、どんな地域、社会なのか。親の作った借金で国や地域が破たん寸前になっていないか。返済する働き手の少ない、高齢化した廃墟のようなまちになってはいないか。雇用や社会保障を国や行政に頼りっきりの市民であふれていないか。子ども達に、オヤジ、何なんだこの状態は、と言われたいために、またその状況に違和感を覚えない無気力な子ども達にしないために、今苦労があったとしても、借金に依存している体制は改め、行政と協働できる主体的な市民によってまちが運営される体制をつくらなければならない。すべては地域の宝であり、何よりかわいい子ども達が、大人になって苦勞しない社会をつくるために、今私達が汗をかく、古くから行われてきたごく自然な行動である。

かっこいいよ父ちゃん、と言われるかどうか。こんな苦勞もあったが自分達がこの成果を導いたと将来自分を誇れるかどうか。それこそが青年会議所が目指す「明るい豊かな社会」に他ならない。